走り読み文学探訪リバイバル(その45)

# 「警視庁草子」　山田風太郎

紹介者：榎本博康

[紹介]

明治6年10月28日から、明治10年2月25日までの、3年4ヶ月の物語である。すなわち征韓論に敗れた西郷隆盛が薩摩に下る日に始まり、西南の役に参軍する警視庁抜刀隊の出陣行進で終わる。この歴史の中で、元同心の千羽兵四郎が江戸から明治になった時代に自分の生きる道を模索しつつも芸者のヒモの生活を続け、新政府の警視庁をからかうことに当座の喜びを見出し、隅のご隠居こと元江戸南町奉行駒井相模守の絶妙にして珍妙な知恵を借りて活躍する。それはいつしか、初代警視総監川路利良と隅のご隠居との知略を尽くした戦いの様相を呈してくるが、その確執は怒涛のような新時代の勢いに飲み込まれて行く。

登場人物は先に挙げた西郷の他に、大久保利通、岩倉具視、黒田清輝、井上肇や、落語家の円朝、半七捕物帳の半七、幼児の樋口一葉、少年の夏目漱石、森鴎外、毒婦高橋お伝、皇女和宮、清水の次郎長等々といった豪華な顔ぶれである。

[感想]

改めてお断りしておくが、ランニング文学探訪は、良書を紹介するのが目的ではない。ランニングがどのようにフィクションの世界で描かれているか、またシンボルとされているかを訊ねながら遍歴する試みである。しかし、好きな作品を扱った方が面白いに決まっている。今回は私の敬愛する山田風太郎先生である。残念ながら先日ついに他界されたが、先生のエンターティメントへの徹底ぶりはすごいものだ。所で「ついに」と不謹慎な言葉を使ったが、これはかねて先生が俺はもうすぐ死ぬとか言いつづけて、「あと千回の晩餐」などの作品を著してきた経緯があるからであり、ある新聞の文芸欄での評を借りた表現である。

山田先生の作品と言えば、私はやはり「くノ一忍法帖」などのＢ級忍者ものが、まず思い浮かぶが、独自の時代考証に基づく明治ものに定評があり、特にこの「警視庁草子」は、ずいぶん昔にラジオで朗読が連続放送されていたが、この(2001年)9月にテレビドラマで公開されるという。史実に依りながらも、虚実織り交ぜた縦横な筆に魅せられる。そして、もう生きている人が少なくなって、本物の歴史になりつつある明治、しかもその黎明期の時代の息遣いを活きいきと描いている。小説でなければ描けない世界だ。

ここでは、当時の政府高官の傍若無人ぶりが忌憚なく描かれており、それでも当時は植民地になってもおかしくなかった日本を、一流国家に仕立てて行く気概があるが、その悪いところ

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

だけが百年以上の時を経て、最近の外務省の問題[注i)]へと、脈々と受け継がれているのではないかと、暗然たる心地にさせられる。

さて、ランニング文学だ。この話では陰のご隠居の情報源として元岡引などが走りまわる。そこまでは銭形平次と同じだ。ここからが山田先生の斬新さである。

明治7年1月14日の夜、かの懐かしい五百円札（とは言っても1994年まで発行されていたが）の肖像の右大臣岩倉具視が赤阪の仮皇居を出て馬車で帰る途中に刺客に襲われる。幸い浅傷（あさで）であったことと、全くの闇夜で二の太刀を浴びずに生き延びることができた。警視庁は、不時の参内を知り得たのは、岩倉邸から尾行したに違いないと考えた。しかし馬車を走って追っては必ず怪しまれる。そうだ、怪しまれずに追うには人力俥を使ったに違いないと。

そう、走ることは尋常ではないのだ。怪しいのだ。所が人力俥は走ることが商売なので自然なのだ。残念ながら、現在は街を走る商売がない。このアイデアは正に明治だ。しかし山田先生は考えた、人力俥で馬車を追いかけ続けるのは並外れた体力の車夫でも無理だと。そこで刺客は人力俥を乗り継いで走る。忍法帖では奇想天外な術を繰り広げた先生が、明治時代ではそうも乱暴なことは書けないと思ったのだろうか。

さて、終りに近く、「菊と葵の紋を付けた馬車が京から江戸へ向け東海道を疾走し、それを五十人以上の旅合羽に長脇差（ながどす）のヤクザが走りながら警護し、さらに四人の虚無僧が追う。そして平塚の馬入川を渡った所で、太刀を佩（は）いた百人の警視庁抜刀隊が迎え撃とうとする」という、漫画家も馬鹿ばかしくて描かないようなすごい場面がある。馬車には陰のご隠居派の者達が乗っているのだが、一方虚無僧は警視庁の巡査達で、京から一日八十キロのペースで走る馬車を追って走り、疲労困憊である。川越や山越えで、馬車が時間を要する間に何とか遅れを挽回しながらという、すさまじさだ。やくざの方は、清水の次郎長の号令で、浜名湖を過ぎたあたりから徐々に増えてきたのだ。でもこの馬車は一体何なのか。

この話の大きなプロットは、明治の新政権に対し、違和感を持つ旧幕府の人間達や、抗戦して下北半島に追われた元会津藩士達が、新時代での生き方を模索しながらも、結局は政府側として西南戦争に参加していくという、歴史の潮流そのものである。でも作者はそれを決して良しとしているのではないようである。どうも陰のご隠居とは、タイムスリップした山田風太郎自身であるらしいので。

物語から時代が下って明治22年に鉄道の東海道線が開通し、明治25年にきんさん・ぎんさんが誕生。私の父が生まれるのは、さらに明治も終わり頃である。

（初稿2001.9.15）

［リバイバル感想］

ちょうどテレビで長岡花火大会を放映していた。２年続いての中止なので、2019年の録画であるが、その見事さはなまじの形容を超越する。3時間番組の長さを微塵も感じなかった。ただし8月1日の「慰霊」と、8月2日、3日の「慰霊・復興・平和への祈り」3発は打ち上げられたとのこと、コロナ禍でも決して止めること無い強い思いがある。

で、ある時に長岡市出身の方が言っていたことを思い出した。その方のおばあさんは誰かに「長岡ですか、新潟県ですね、」と言われると、「違う、長岡じゃ、」と答えるという。戊辰

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

戦争から100年以上を経過しても、あくまでも官軍と戦った長岡藩の気概が残っていることに驚いたが、考えてみれば現在の日本には戊辰戦争の影響が濃く残っている。

先日、防府市の毛利氏庭園を訪ねる機会があったが、毛利博物館で長州藩の歴史の概要を知ることができた。毛利家はかつて鎌倉幕府の重臣であり、安芸の国（広島県）に分家し、最盛期には現在の山口県を中心にして広島県から九州北端部まで、また日本海側も含む広範な版図であったことを知った。しかしながら西軍の長州藩は関ケ原以降に４分の１に減封されたため、徳川幕府に遺恨を抱く一方で、新田開発で実高を稼ぎ、幕末には相当な実力を蓄えることになったらしい。

毛利庭園の一画と毛利博物館

薩長を主体とした官軍が錦の御旗を押し立て、旧幕府軍に賊軍とレッテルを貼ったことに、旧幕府軍（いやなネーミングだなあ）は大いに立腹したが、勢いの差にどうすることもできない。長岡藩は勝ち目のない戦況を冷静に分析しながらも、幕臣としての矜持をもって戦ったと言われている。（この史実を持ち出して、勝海舟をねちねちといびった福沢諭吉は何とも性格が悪い。）

最近の総理大臣を振り返ると、岸信介、佐藤榮作、安倍晋三と山口県出身が多くを占めていることは、この近世の歴史と無関係ではあるまい。もちろん時代をぐっとさかのぼれば伊藤博文、山縣有朋、桂太郎らが山口県から名を連ねる。広島県から山口県に入ると、途端に道路が良くなるのも、関係があるのだろうか。

警視庁草子に話を戻そう。この小説は旧幕臣と江戸っ子側からみた、明治黎明期の正史であると思える。

＜余談１：武士の切り捨て＞

一般に戦争が終結したり、統治勢力が代わると、軍人の失業対策が必須となる。豊臣秀吉の朝鮮派兵はそのような文脈のひとつであろう。台湾の太魯閣（たろこ）渓谷を訪問した時に、その切り立った崖を貫く歩道を開削したのは、毛沢東軍に敗れた蒋介石の兵隊達であったと聞いた。平時における兵隊たちの雇用を創り出したものだろう。アフガニスタンでタリバンの政権が永続するのであれば、故中村哲医師が建設を指導した用水路のような、インフラ整備に戦闘員を転用することができるだろうか。その前に再教育ができるのだろうか。

明治の時代になり、特権を奪われた士族の多くは、政府軍が武士階級からの志願兵で構成されることを期待したが、明治政府は戦争形態が全く変わってしまったとの認識に立って、各県に兵役の人員を割り当てたが、その出自は問わなかった。やがてこれは国民皆兵の徴兵制度につながる。不満を抱いた武士たちに西郷隆盛は担ぎ出され、西南戦争で敗北し、武士の時代の決定的な終焉を迎える。元会津藩士達が政府軍として西南戦争平定に派遣されるという非情な

Copyright © Enomoto PE Office, all rights reserved.

場面でこの小説は終わる。

＜余談２：錦の袈裟＞

　最近、小三治で落語、錦の袈裟を聞いた。若い衆が吉原でモテるために、粋なデモンストレーションをしようと考え、全員が錦のふんどしで裸踊りをしようと企画したが、与太郎の分が無い。与太郎がかみさんから入れ知恵をされて、和尚さんの錦の袈裟を借りるという話だ。この話がいつからあるのかは分からなかったが、もしも明治初年の頃にあったら、江戸っ子たちは錦のふんどしの裸踊りの場面で腹がよじれて死ぬほどに大笑いをしただろう、との妄想を抱いた。

(2021.8.29)

---

注i　：2001年に発覚した「外務省機密費流用事件」を指すと思われる。

Copyright　©　Enomoto PE Office, all rights reserved.